

光明第十八号

様

住岡狂風

巻頭の叫び！

□千言千当不如一黙

「ある所に一助というものありしが、その友なる十助という者にむかいて申しけるは、そこ元はかねて、百助と心易きよしなり。某も百助とは知り合い中なるが、この頃ある者の咄すを聞けば、百助こそ、かやうかやうの不埒ある風聞なれば、そこ元にも御心得あるべしと云。十助が曰く御恩召しより御心得かたじけなし。我らも、その噂を聞いて、すまぬ事と思ひ、百助に段々聞きし所がやうやうのまちがいにて、実、百助に誤なき謂なり、と云ふ。一助笑ふて曰く、さてさて貴様は、正直なる人かな。その事を百助に問い給はば、我悪しきを我悪しと云うべきや。わが事を我が言うほどあてにならぬ事はなしという。十助曰く、なるほどそこ元の御仰の通り、我が事を我いうはあてにならぬ事なり。亦人の事を人が噂するも真実ならぬこと世に多し。ここを見れば、自身のことを自身に聞くも誠ならず。人の噂を人が噂するもいつわり多ければ、誠の所は、とても知れぬが世の中なれば、よしあしともに、人の噂はいわずかたらぬほど、まちがいのなき事はあらじと申されけるぞ道理に覚え侍る。千言千当不如一黙(脇坂義堂、民の繁栄より)

私たちの疑いから、正しき人を正しからざるものにしてはなりません。

したい人の噂をやめましょう。今日から人の欠点短所を言わないことにしましょう。人間には浅はかな智慧や、当て推量によつて、人を裁くことは赦されてはいません。

覇気ある者は覇気によつて亡び、

策略は策略によつて亡び、

兇暴は兇暴によつて亡ぶ。

亡びざるものは、誠！ あるのみ

昔ギリシヤにアレキサンダー大王という不世出の英傑があつた。彼は英傑であつた。ペルシヤのダリオス王を亡ぼして、その国を奪ひ、エジプトを征し、到る所で勝つた。アレキサンダーには、東西文化を融合して、大帝國を建設しようとする野心があつた。彼のもてるものは覇気である。彼のもてるものは、大帝國を立てんとする野望と、覇気である。覇気はヤマキである。元氣でもない、勇氣でもない。彼アレキサンダー大王が死後、マケドニヤ國は、四分五裂の有様となつた。

支那に於ける秦の始皇は戰國の世を統一し、諸侯を討ちて、成陽に都し英傑たるの名を得た。けれども彼始皇は、天下を平定して、人民塗炭の苦を救うのが目的ではなかつた。彼が、帝位につくや、七十万人の罪人を使役して、渭水の南に莊大なる阿房

官を営み、七百の離宮を建てた。彼はこれによつて、帝室の尊きを知らしめようとした。彼は天下の兵器をとりあげ、富豪十二万户を都に集め、苛酷なる法令を布き、皇室又は政治のため善からざる書物は焼き棄て、数百人の学者を殺した。かくの如くして、国家の太平を得んと思つた。又彼は、万里の長城七百里を修繕増築して、北より入り来る匈奴を防がんとした。

彼は覇者である。帝王の道を行つたのではない。彼の死後、二世皇帝位につき、秦は忽ち亡び、世は再び乱れた。かの始皇が帝位について僅か十五年にして、秦は亡んだのである。

ナポレオンの覇業も、泡沫の様な繁栄であつた。今のドイツは、カイゼルの野心ドイツ国民の覇氣によつてかかる哀れさに陥つてゐる。

覇氣とは、利己主義の間におこる勝を制せんとする意氣である。我利我利者の有するやま氣である。覇氣の底には、利己心がある。己のためにせんとする野心がある。覇氣ある者は、一見堂々たる風があり弱き者を虐げる力がある。けれども覇氣ある者は、覇氣によつて倒れなければならぬ。覇氣ある者は、結果のために、手段を選ばぬ。守成功を待つことが出来ないで、一徹短慮に盲進する。彼らは、民衆の刀を考えない。一個一個にあたつて、弱くて愚かな民衆を暴力によつて恐れしめ従わしめ、しかも民衆には、それらが自覚する時、彼ら以上の力を有することを知らさない。一人の覇者は、民衆の呪いによつて亡ぶ。

現代はあまりに覇氣に満ちている。氣の短い現代人はあまりに覇氣を尊んでゐる。一葉散つて天下財界の秋を知つた今日、大小成金の哀れな零落振りを見よ。五百万長者とやら、どこの代議士とやら、どこ銀行の重役とやら、男の面も立てないで卑怯にも犬死して、責任を避けてゐるではないか。都会にも田舎にも、覇氣に満ちた強そうな人間が満ちている。相場に手を出す。投機をはじめ。一獲千金富を誇らんとし、人の信頼も無きに、あらゆる策略によつて、議員たるの名譽を得んとし、一家を亡ぼし、一身をあやまり、国家社会に害を及ぼし、世道人心をあやまる。

覇氣ある者の事を行うや批判なき猛進である。突進である。勢の増すに及んで益々猛進し、自ら制することを知らない。その行くや悍馬の如く、疾風の如く、何者をも打破る勢いがある。けれどもその勢いたるや虚勢である。真実の力でも真実の勢いでもない。中の虚なる勢いである。悍馬の勢いにまかせて走る時、その道に一本の太木が横たわつていたならば、馬はその木にあたつて、自分の力で倒れなければならぬ。覇氣は覇氣によつて倒れなければならぬ。我々が、一方にかたまる時、力が、一方にこるとき、そこに覇氣を生ずる。しかも、その実は虚である。虚につけこまれた時、我々は覇氣によつて倒れなければならぬ。

「人を落せば穴二つ」恐しいことだ。私たちほ、世の中に立つて、策略によつて、自分の欲を満足している。商人や政治家等策略によつて立たない者はないと言つてよからう。けれども策略の裏には、正しからざる心がある。たとえ一時の成功はしても永遠の勝利を得べきものではない。世の中には、心も体も正しく働かさないで、プラブラして、きたない策略によつて、人の物を取つて暮してゐるものがある。一つの身代がつぶれそうな時、その周囲には、甘い汁を吸わんと、餓鬼のような人間たち

が、手をかえ品をかえて、人のよい主人をまわして、家を取り、田を売らせて、自分の体を肥しているのを見る。古い屋敷のあとには、草がはえて、古い木などが昔をしのばせているのを見る。村では村で策略が、都会では都会で策略が一層烈しくなっていく。

一つの火鉢を十人かこんでいると、その内の一人が、急に威張り出して、火鉢の年分も取って、大またであたり出した。後の九人は、不平であった。けれども、不平を言ったり、理屈を言えば、すぐその強い男の兇暴な手が彼らの上に来るので、おそれ、黙ってしまった。けれども永い間には、彼らはせまい不自由な、それがあたり前だと思ふ様になつた。そして、不自由なとも、無理だとも思わないで暮しているようになった。彼の強い男は、自分が威張っていることもあたり前のように思つて、ますます我儘勝手冷酷無慈悲になつて行つた。

強い男が、益々兇暴を事とするに及んで、九人の内の者の一人はつい反抗したので、彼は、たちまちその男を殺してしまつた。あと八人は、急に考えた。彼らは自覚した。そして、結局彼らは、強い男一人の世界ではなくて、彼ら九人の世界であることを知つた。彼らは、八人で結束した。そして、八人の力で彼一人を倒した。そして、九人は、火鉢で皆同じ様に温まつた。過去に於て地上では、何度も何度も行なわれた覇気も策略も兇暴も、それらは、皆次から次と亡んで行く。

私たちは、世の中に立つて、策略や兇暴と戦わねばなりません。けれども、策略に策略を以て戦い、兇暴に兇暴を以て戦つてはなりません。私のある日の日誌には次の様なことが書いてあります。

「角力取りの様な馬鹿力のある、河馬の様な愚かな、猿の様に悪賢い人間たちの前で、もつともつと、腰も立たないほど打たれて見たい。それも自分向上のため、人を救うためなら忍んでも見よう。僕の心は又明るくなつた。平静な心で彼らのために祈つた。『私は、暴力を振う弱い人間より、暴力に虐げられても破産せざる強い人間になれ。』と誓つた。」

私の兄弟たちよ、自分の人格を棄てて世を渡る暴力の強い人間たちの間にはさまつて、清く正しく歩んで行くことは、辛いことです。

けれども私たちが正しい間は、悲しんではなりません。その位なことに敗けてあなたを棄ててはなりません。正しからざる強そうな彼らは終には、その力によつて倒れなくてはなりません。私たちは、その場合正義の鼓を鳴らして、不正を倒さねばなりません。一步進んで彼を救はねばなりません。不実な夫の情ない仕打ちに泣いた妻ほ、夫のもとを去ることも出来ます。何時までも泣いてこらえていることも出来ません。そして又、心をひきしめて「夫を救つて見せる。この誠を知らせて見せる。」と力強く奮いたつことも出来ます。

生きんとする努力

□私は宗教信者たちに言いたい

私は宗教信者たちに言いたい。お寺に参る人たちは、あまりに、「結論に、急ぎつつある。」「予備なしに結果を得ようとしている。」多くの人たちは、ただ何も考えないで、ただぼんやりしていて、そして、何か得ようとしているのではあるまいか。

釈迦が藍毘尼園で母君摩耶夫人の散歩中生れ出でて、弧々の声をあげられた。「天上天下唯我独尊」実にこの一語であった。ある人は、「一人死んで一人死ぬる！」という意だと言った。ある人は「我こそは人間だ。」との叫びだと言った。実にこの一語は、「我は人なり。」の叫びである。この一語、それは、釈尊の「オギャー」の声であり、同時に、私の「オギャー」の声でなくてはならぬ。懐かしい。そして、厳粛な人生肯定のこの一語、私たちの生きんとする努力はここから初まらなくてはならぬ。「私は人間だ。生きねばならぬ」私たちの苦悩煩悶はここから出て来る。真実に私にとつて与えられたものは私だけだ。私たちは誰を頼りにしようもない。私は私だ。「私はたった一人生れた。そしてたった一人生きねばならぬ人間だ。」「私は私を頼らなければならぬ。私は私を救わなければならぬ。私は私として生きねばならぬ。」そうだ。私たちは私を救うために、他の人間の智慧や理屈を借ることは出来ない。私は、私で自覚しなければならぬ。

釈尊には、四季別々の宮殿があつた。王の位もあつた。美しい妃もあつた。御子もあつた。お妾もあつた。美衣美食何でもあつた。

けれども釈迦にとつては、そんなものは、「真に生きねばならぬ。」という大事実の前には、何の足しにもならなかつたのだ。「明日でも来るか知れない死、今来るか知れない死の闇黒、それとにらみあいをして、しかも生きねばならぬ。矛盾ではないか。生きねばならぬ。けれども今にでも死の闇黒が来たらどうする。」じつとしてはいられない。釈尊は全てを棄てた。全てを棄てて生きようとしたのだ。その時の釈尊にあたえられたものは、婆羅門教の難行苦行によつて得られたものは、体の衰弱そのみであつた。弱りきつた体を、尼連禪河の清き流れで洗い、恵まれた牛乳を飲んで体力をつけられた。人間たちはこれを見て、「悉達は墮落した。」と言つて攻撃をした。釈迦には、難行苦行も、「生きねばならぬ」やみがたき欲求の前には何の価値もなかつたのだ。ヒシヒシとせめかけて来る「生きねばならぬ」という欲求の前には体を養う牛乳の方がどれだけましだろう。かくして、仏陀迦耶の菩提樹下に於て、自覚し、体得し、「生きねばならぬ。生き得る。」自信を得られたのだ。「一切衆生悉有仏性」の大信念。私にとつては、「汝も人である。汝は汝で生きよ。汝自覚せよ。目醒めよ。汝が人なることを知る時、汝は生き得る。汝は生きんとする努力をしなければならぬ。」の叫びであり、激語だと思ふ。

キリストに聞け、彼は人の子に教えた。

「汝地上の宝を蓄ふることなく、虫食わず、錆びず、腐らず、盗まれざる天の宝を蓄えよ。天の宝ある所、汝の心又あるべければなり。身の燈火は眼なり。眼あしから

ば身はくらかるべし。もし汝の中にある光暗からば、その闇は如何ばかりぞや。」と。

心霊のかがやき、私の自覚なければ生きる甲斐なし。精神を覚ませ、精神に生きよ。私たちの精神、精神に蓄えたる自覚は永遠に亡びないからである。

「福なる哉、心貧しき者や、それ天国は彼らのものなればなり。」

福なる哉、悲しむ者や、それ彼らは慰めらるべければなり。

福なる哉、柔和なる者や、それ彼らは地を嗣ぐべければなり。

福なる哉、義に飢え渴く者や、それ彼らは、飢え足らざるべければなり。

福なる哉、憐れみ深き者や、それ彼らは憐れまるべければなり。

福なる哉、心の清き者や、それ彼らは神を見るべければなり。

福なる哉、和平を事とする者や、それ彼らは神の子と称えらるべければなり。

福なる哉、義のために苛く責めらるる者や、それ天国は彼らのものなればなり。

福なる哉、我が為に罵られ詐らるるものや、それ天の報むく大なればなり。……」

今日一日、今日一日、私に与えられた時を真実に生きんとする努力に費やすより外、私に何があるうか。基督は、生きんとする道を求め、天使たるの自覚を有つ迄には、寂莫荒野に出でて、一人思い、一人苦しみて四十夜も食わないで、端坐し、心中におこる悪魔と戦つたと言うではないか。生きんがための煩悶、私たちの全てはこれから始まらなくてはならぬ。

我が親鸞を見よ。門地を棄て、栄華を棄て、その上に、二十年間比叡山における自力修行深い学問を棄て、仏凡一体法界一味の絶対安心に自己を見出し、しかもヒシヒシと生きんとする内的欲求のためには、墮落僧よ破戒僧よと罵られ責めらるるのも厭わず、妻も持った。肉も食った。「妻ももて、肉も食え、子を愛せよ。漁れ、田を耕せ。その内に、汝らの生きる道はある。」と教えてくれた。親鸞が、肉を食いつつ子を愛しつつその内に心霊の光を認め、裏切る者のために祈り、首をかかんとした者を赦し救うまでには、長い長い、苦しい苦しい、煩悶があり、努力があつた。狂いそうな焦燥、大雨大風の夜のような内約苦痛煩悶があつた。そして、それは黒谷の法然によつて一時に、親鸞の心霊の殿堂に燈火をあたえ、光明を見出すことによつて救われた。けれども、親鸞の心の光は、親鸞の持てるものである。法然は縁となつたに過ぎない。困は親鸞にあつたのだ。燃え燃えんとする者に火がつけられたのに過ぎない。

宗教を信じようとする人たちよ。悲しむ人たちよ。煩悶する人たちよ。そして全ての生ける人たちよ。私たちは、私たちの心に、生きる道を考えさせなければならぬ。如何に生きんとするか、それが第一の問題でなければならぬ。死については、私たちは何物も与えられていない。今の私にとっては、生きんとする切ない欲求しかあたられてはおらない。

私たち、今の私、生きねばならぬ私をぬきにして、ポツと死の問題や、安心や悟りはない。真の光明は、田を耕す私、本を読む私、一家の内の私、国における私の内にでなければならぬ。

仏凡一体、生きねばならぬ私の忠実な生の歩みの中に信がある。神の心、仏の慈悲が、生きんとする私、忠実に考え、清く愛せんとする私の努力をおいて他にどこに於て表われようぞ。

大地の上を、ドシンドシンと力強く、苦しませられ、虐げられ、打たれ、倒され、裏切られ、疑われ、恨まれ、悪まれ、罵られても、立っては起き、起きては立って、真実の自分に、目覚めたる自分の内的生命に生きようとする力、誠、愛、無我こそ、我が真の歩みでなければならぬ。

生きる人たちよ、自覚なしに、人生を歩み、生きんとする努力をぬきにして、人の信仰や、人の信念を自分の上にはりつけてはならぬ。寺に参つて一生を無駄に費しつつ、自分の上に、何かをはりつけて、安心しようとする人たちほど哀れな者はない。私の信仰は、私の心のみがもつ信仰であり、あなたのもつ信念は、あなたという特殊の上、宇宙間唯一物の上にあられた信念です。私は、それを取ることと与えることも出来ません。

生きんとする努力を続けてお行きなさい。全ての問題の最初はここにある。煩悶がおこるでしょう。苦しいでしょう。けれども弱くはなりません。途中で、卑怯になつてはなりません。

人よ、人よ、濁つた心と、愛し得ざる心と、恵む心と、騎る心と、詐る心と戦いましょう。全てに対して、感謝しましょう。トルストイが死ぬるまで、

「わしにかまってくれな。わしはほつておけ。世界には、何億という悲しい苦しい人たちがみちている。」と言つたように。

後記

□ 妹たちよ弟たちよ。夏が来た。

汗がにら出しても見よう。黒いような緑！ 焼けるような土、生きる甲斐がある夏が心からうれしい。学生諸君、この夏何でも一つ大きな仕事をせよ。光明拾九号は、九月の初め諸君の手に入るだろう。「健在なれ。健在なれ。」これこそ狂風の最後の祈り。